

ジャックと豆の木

大分大学教育学部附属幼稚園（文責／園長 石川照代）



子どもを変える！「魔法のごとば」

3歳児の園庭に、ベンチのようなフオルムのセメントでできた台があります。そこで小競り合いは起きました。

自分の後ろから登ろうとするまあちゃん（仮名）を、何とか阻止しようとして手や足で払いのけようとするみつくくん。まあちゃんも、負けじとみつくくんの足をつかんで「どいて！」と引きずり下そうと必死の形相です。3歳児さんだから、動きは緩やかですが、バランスを崩して落ちては大変だと、私は二人を何とかケガさせないように「落ちたら危ないよ」と言いながら、手を添えたりしてただ見守っていました。

そこへ教頭の直野先生が来て、みつくくに声をかけました。側の私に聞かせるように、

「園長先生！みつくくん（仮名）は、とってもやさしいんですよ！あの時かっこ良かったよね！」直野先生はほっぺを両手でそっと挟みながら、優しい声で言いました。



すると、何とということでしょう！みつくくんは、さつきまで払いのけようと振り回していた手を、まあちゃんに差し伸べ、驚いたことに、まあちゃんを引っ張り上げようとしたのです。先生は二人をびったり座らせて「みつくくんやさしいね。ありがとう。」と声をかけました。まあちゃんも途端に笑顔になり、それからしばらく二人は、電車に乗っているかのように「プップー、プップー」と声を合わせ、体を左右にゆすりながら、それはそれは楽しそうに過ごしました。まるで魔法でした。たった一言で、しかも一瞬にして子どもは変わるのだということ、これほど鮮やかに見せてもらったことはありません。幼稚園の先生の「子ども理解」のスキルの高さは、私の想像をはるかに超えていました。このスキルとは、おそらく、日頃から子どもの優しいところやいいところを確実に把握しておき、その時々状況に応じて、具体的に褒める材料として持っていること。その根本に、「どの子もいい子優しい子」だと信じ抜く心を持っていることだと思います。先生のその気持ちは、たとえ3歳であっても、ちゃんと伝わるのです。先生の今、褒めることの大切さが良く言われます。子どもを伸ばすのに何より大事な「自尊感情」を高めることができるからです。しかし、子どもにも依るでしょう。褒めるのは簡単ではありません。年齢やその子の性格のように褒めること。小さいうちは、何を褒められたのがしっかり伝わるように褒めること。大きくなってくると、その子にとって、褒められること、その子の成長を信じて、心から褒めることです。私にも、できるでしょうか？

伝統の「四校園子ども集会」は・・・

* 去る5月2日（火曜日）附中グラウンドで恒例の子ども集会。が開かれました！

同じ敷地内に全ての附属校園が建てられているのは、全国の教育系大学でも珍しいのだそうです。幼小中高大という教育システムの連続性や相互の連携を重視している文科省が、大分大学のこの環境に着目していると言います。経営母体である大学も、この伝統の「子ども集会」を有効な実践事例と考えているようです。それでは、一番小さな幼稚園の子どもたちにとって、年長者との「ふれあい」以上に、一体どんな教育的効果があるのでしょうか？

一つは、「あんなお兄ちゃんお姉ちゃんみたいになりたいな」と思える姿と出会うことです。優しくされた経験は、優しくする姿につながります。4月の頃、「進級した子どもたちが、急にしっかりしてきました。年少児さんをお世話する姿がたくさん見られます。」と言う担任の声をよく聞きました。きっと、卒園児の姿に学んだのでしょう。小さな子どもでも「なりたい自分」のイメージを持つことができるのです。この日、三校の児童生徒の姿は、とても素晴らしく、目標たり得るものでした。

